

Reed

KANSAI
UNIVERSITY
NEWSLETTER

Man is a Thinking Reed.

No.83

January, 2026

関西大学ニュースレター

発行日：2026年(令和8年)1月26日
発行：関西大学 総合企画室広報課
大阪府吹田市山手町3-3-35
〒564-8680 / TEL.06-6368-1121
www.kansai-u.ac.jp

■対談
高橋涉
芝井敬司

・株式会社オリエンタルランド 代表取締役社長(兼)COO
・学校法人関西大学 理事長

■

高橋涉
芝井敬司
・株式会社オリエンタルランド 代表取締役社長(兼)COO
・学校法人関西大学 理事長

「ハビネス」のつくり方
変わらない理念、変わり続ける勇気
すべての人に届ける

■対談
高橋涉
芝井敬司

・株式会社オリエンタルランド 代表取締役社長(兼)COO
・学校法人関西大学 理事長



■対談 1

■リーダーズ・ナウ 9

卒業生 — 作家 一穂ミチさん

芸人(吉本興業所属) たけだばーべきゅーさん

在学生 — 文学部 1年次生 三戸秀平さん

法学部 3年次生 加藤春輝さん

■研究最前線 / Research Front Line

世界を魅了する日本アニメーションの歴史と未来をひもとく研究

日本のアニメーションは国境を越えてゆく — 15

社会学部 — 雪村まゆみ教授

• Japanese Animation Crosses Borders
Faculty of Sociology — Professor Mayumi Yukimura

■トピックス [学内情報] 19

関西大学北陽高等学校 創立100周年記念式典・祝賀会を挙行

「知徳体の調和」を胸に、さらなる100年へ！ ほか

■関大ニュース 23

第48回関西大学統一学園祭を開催 ほか

■対談

すべての人に届ける 「ハピネス」のつくり方 変わらない理念、変わり続ける勇気

高橋 渉

・株式会社オリエンタルランド 代表取締役社長(兼) COO

芝井 敬司

・学校法人関西大学 理事長

「夢と魔法の王国」東京ディズニーランドと、「冒険とイマジネーションの海」東京ディズニーシーの2つのテーマパークを中心に、ホテル、商業施設、モノレールなどが一体となった東京ディズニーリゾート。

2025年4月、その運営会社である株式会社オリエンタルランドの新社長に就任したのが、関西大学卒業生の高橋渉氏。

千葉県浦安市舞浜の同社を芝井敬司理事長が訪ね、在学中の思い出から、東京ディズニーリゾートのあゆみや事業展望、若者たちへのメッセージまで語り合った。



©Disney

■対談



◆地元・浦安から大阪・関大へ。下宿は梁山泊

芝井 高橋社長は、千葉県のご出身とお伺いしました。
高橋 実はまさにこの場所、浦安市の出身です。生まれも育ちも浦安で、大学の4年間だけ大阪の関西大学で過ごしました。
芝井 本学は関西出身の学生が多く、当時は特に関東出身の学生は珍しかったと思います。なぜ関西大学に進学されたのでしょうか？
高橋 最初は関大のことは知らなかったのですが、高校生の時に同級生から良い大学だと聞き、志望校の一つにしていました。東京で地方試験があり、関東の大学より少し試験日が早かったので受験してみたら、運良く合格をいただいたので進学を決めました。親戚もおらず全くの単身でしたが、次男ということもあり、チャレンジができる環境でしたので思い切って進学を決めました。

芝井 当然ながら下宿をされていたと思いますが、大学の近くだったのでしょうか？

高橋 下宿先は大学の正門から50メートルほどの場所でしたので、すっかりたまり場になりましたね。いつも鍵を開けていたので、私が帰宅すると知らない学生がいることもあります。

芝井 まるで『水滸伝』の梁山泊のようですね。文学部ではアメリカ文学を専攻され、多田敏男先生のゼミだったそうですね。多田先生は英文学科の重鎮で穏やかな先生でしたが、卒業論文の指導は厳しかったと聞いています。

高橋 『トム・ソーヤーの冒険』や『ハックルベリー・フィンの冒険』などマーク・トウェインの作品を研究し、卒論としてまとめました。先生からは「よくできている」とおっしゃっていただき、うれしかった記憶があります。

芝井 課外活動では、クラブやサークルに所属されていたのでしょうか？

高橋 「京の風情会」という、京都を散策・調査するサークルに入っていました。写真班や文学歴史班、工芸班、喫茶店班、ガイドブック制作班などに分かれて京都を散策し、年に1～2回「京風展」というイベントを大学生協で開催していました。執行部も務めるくらい、サークルでの活動に力を入れていましたね。

「静かに去り行く春の日に……さればいざ歌わんかな……」と口上から始めて、仲間たちと肩を組んで関大の『逍遙歌』を歌ったのも良い思い出です。千里山キャンパスにまだ第1グラウンドがあった時代でしたので、そこで友人たちとソフトボールにも打ち込んでいました。あと関大前の「フタバボウル」と「阪急ビリヤード」には通い詰めたものです。おかげで社内のボウリング大会で優勝したこともありますよ。

アルバイトでは北新地でお花を配達する仕事をしていました。そこでは大阪の言葉や考え方などを教わり、大学生のうちに大阪弁はすっかりネイティブレベルになりました。決めつけはいけませんが、地域によって着眼点や価値観などの違いはあると感じています。相手のバックグラウンドとなる地域の文化を理解すると距離も近くになりますよね。学生時代の経験は今でもビジネスで関西の方とお話しする時に役立っています。



▲サークル活動に力を入れていた学生時代。所属サークル「京の風情会」の仲間たち（写真前列左：高橋氏）

◀大学生協で開催していたイベント「京風展」

◆アメリカ文学からディズニーの世界へ

芝井 大変充実した学生生活を過ごされたよううれしいですね。卒業後の進路はどのように考えておられたのでしょうか？

高橋 文学部では教職課程も履修していましたので、英語教師も視野に教育実習にも行ったのですが、自身には他の仕事が合うのではないかと考え、別の進路を考えました。OA機器の商社等から内定もいただきましたが、最終的に一番興味を持った会社がオリエンタルランドでした。

オリエンタルランドのことは、地元・浦安沖の埋め立て事業を進めている会社として当然知っていました。親が漁師をしていたこともあり、身近な話題もありました。気になって調べてみると、ウォルト・ディズニー・カンパニーと契約してテーマパークを建設する計画があることを知り、直感で面白うだと。そして、その計画の中には私が関大で研究した「トムソーヤ島」もありまして、運命を感じました。面接でも『トム・ソーヤーの冒険』の話を力説して採用してもらいました。東京ディズニーランド開園2年前のことです。

芝井 アメリカ文学とディズニーは深い関係がありますので、就職のご縁につながったのですね。

◆東京ディズニーランド開園に向け、資金調達に奔走

芝井 入社当時の会社はどのような様子だったのでしょうか？

高橋 東京ディズニーランド開園に向けて埋め立てを終え、地盤改良工事の時期でした。入社してまず担当した仕事が建設費の予算管理でしたが、お世辞にも管理できているとは言えない状態でしたね。その理由は、「作りながら考える」ため、もちろん設計図はありますが、「やったことがないことをやろう」と計画が常にアップデートされます。さらに既製品はなくすべてが特注品ですので、コストがどんどん膨れ上がっていました。

東京ディズニーランド建設に係る総事業費は約1,800億円でしたが、開園前で営業収入がほぼないため、資金は金融機関から協調融資での借り入れが必要でした。しかも長期金利が9%台というような高金利の時代。京成電鉄と三井不動産の後ろ盾があるとはいえ、大変厳しい資金繕いで、小切手を片手に銀行や手形交換所がある大手町界隈を走り回っていました。

その合間に、自治体や金融機関の方が建設現場の視察に来ら



▲東京ディズニーランド建設の資金調達に奔走した初代IR課の課長時代



芝井 敬司—しばい けい

■学校法人関西大学理事長。1956年大阪府生まれ。1978年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。1981年京都大学大学院文学研究科博士課程後期中途退学。1984年関西大学に着任。1994年文学部教授。2002年文学部長。2006年副学長。2016年学長。2020年より現職。学外の主な役職に、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構評議員、一般社団法人大学スポーツ協会理事など。

れるので、4WDの車を運転して「こちらにジャングルクルーズができる予定です」と案内もしていました。ソフトボールで得た体力が役に立ちましたね。当時はどの金融機関も「そんな施設が本当にできるのですか？」と半信半疑。「遊園地と何が違うのですか？」と聞かれることも多々あり、ディズニーランドの独自性を一つ一つ説明しながら、実は私も本当にできるのか内心では同じように感じていました。

芝井 遊園地との違いのお話、ぜひ詳しくお聞かせください。

高橋 ディズニーランドは遊園地と違って「テーマパーク」なのです。東京ディズニーランドでいえば、「アドベンチャーランド」は自然豊かな冒險の世界、「ウエスタンランド」はアメリカ西部開拓時代、隣の「ファンタジーランド」はおとぎ話の世界など、エリアごとにテーマがあり、地面の色なども違います。キャストのコスチューム(制服)やゴミ箱まで、すべてテーマに沿ったデザインで統一しており、細部まで演出にこだわっています。当時、日本にはまだテーマパークという概念がなく、この説明には大変苦労しましたね。

■対談

◆株式上場とリゾート化へ。オリエンタルランドの飛躍

芝井 東京ディズニーランド開園前がやはり一番大変な時期でしたか？

高橋 開園前と会社が上場する時ですね。東京ディズニーランドは1983年4月15日に開園しましたが、その後社内では株式市場への上場を目指す動きがあり、私は上場準備の担当に選ばれました。東京ディズニーシーの建設計画がある中で、これ以上銀行借入で資金を貯うのは厳しい状況。そこで株式公開によって資金調達の幅を広げようという方針になりました。しかし、当社のような当時未上場の企業がいきなり東京証券取引所の第一部上場を目指すというのは、想像を超える過酷さでした。審査を経て、無事上場を果たしたのが1996年。それまでの4年間はとてもなく働きましたね。上場後は優秀な人材も続々と集まり、会社として大きく飛躍した時期でした。

また振り返ってみると、やはり東京ディズニーランドに加えて



▲1996年、東京証券取引所市場第一部上場当日の写真

東京ディズニーシーが誕生し、そして2つのディズニーホテル、さらにそれらを結ぶモノレール「ディズニーリゾートライン」が完成し、舞浜駅前の商業施設「イクスピアリ」も含め、一つのテーマパークから

「東京ディズニーリゾート」へと進化していった頃が、オリエンタルランドのターニングポイントだったと思います。

2000年に開業した「イクスピアリ」は東京ディズニーリゾートの玄関口・舞浜駅前に140店におよぶショップとレストラン、映画館を擁する大型商業施設▶



◆ディズニークルーズ就航。新たな魔法の旅へ

芝井 2028年度には日本を拠点とする「ディズニーカルーズ」の就航も構想されていますね。ウォルト・ディズニー・カンパニーのCEOロバート・A・アイガーの自伝にクルーズ船の話もありました。御社が計画する今回のクルーズ事業は、先行する世界中のディズニー事業を手掛かりに、お客様に特別な体験を与えることができると確信して構想されたのでしょうか。

高橋 現職に就く前は経営戦略本部長として、世界中のディズニーパークやクルーズ船などを視察してきました。その上で、東京ディズニーリゾートとして次に何にチャレンジすべきかを社内で検討した結果、新事業としてディズニーカルーズが動き出すことが決まりました。もちろん東京ディズニーリゾートもさらに充実させていく予定ですが、クルーズ事業はまず土地の制約がないことが大きい。就航予定のクルーズ船は日本最大級の大きさで、約4,000人の乗客を収容し、約1,200室の客室に約1,500人のキャストが従事します。私たちのクルーズ船のベースでもあります、すでに

アメリカで就航している「Wish」は、大規模な劇場やウォータースライダーのあるプールなども備えた本当に素晴らしい客船であるので、これらを参考にゲストの皆さんに充実した時間を過ごしていただける内容としていきたい。クルーズ船の中にはドレスコードが厳しかったりするものもありますが、例えばジーンズやハーフパンツでもOKで誰でも気軽に楽しめるファミリーエンターテイメントを体現したクルーズ船を目指しています。



ディズニーカルーズ船「Wish」

◆体験価値の向上で特別な1日を

芝井 ファミリーエンターテイメントといえば、私の娘が子供を連れて東京ディズニーランドに行く時に、優先的にアトラクションを予約できる有料サービス「ディズニー・プレミアアクセス(DPA)」が助かっていると話していました。国内では先駆的な取り組みだったと記憶しています。

高橋 DPAの導入にあたっては社内でもさまざまな議論がありました。しかし、特に遠方から来られるゲストにとっては、パーク

での体験は特別な1日です。もちろん並んで体験いただくこともできますが、時間を有意義に使って楽しみたいという方々のニーズに応えたいという想いからサービスの導入を決定しました。

芝井 DPAは、その日の体験の質が上がるということを考えて導入されたのですね。

高橋 ゲストの体験の質、顧客満足度は大変重要な指標です。コロナ禍前は紙チケットで当日券も販売しており、それを購入するため並んでいました。コロナ禍では約4ヶ月間の臨時休園を経て、国や自治体等からの要請もあり、1日の各パーク入場者数をコロナ禍前より制限して営業を再開しました。このコロナ禍をきっかけに紙チケットを原則廃止し、ペーパーレスのシステムに移行。大変な時期でしたが、結果としてゲストの安全や利便性、体験価値の向上を改めて検討する貴重な機会になったと思います。

芝井 コロナ禍の時、私は学長でしたが、大学でも授業をすべて休講、キャンパスを閉鎖しなければならない期間がありました。大学では一番早く対策本部を立ち上げ、緊急事態宣言が発出された際には、他大学に先駆けてオンライン授業を実施し、学生たちの学習機会を確保しました。対策本部ではまず学生の安否確認、マスクや消毒液の確保と備蓄確認をしましたが、いくらシミュレーションしていても平時と有事の違い、現場での判断の難しさを経験しました。

高橋 新型コロナウイルスが流行し始めた頃、私はリスクマネジメント委員会の委員でした。当社でもマスクの調達や備蓄状況を日々確認し、大切なゲストとキャスト・従業員の安全対策をどう確保するか、その判断は大変なことでした。ゲストとキャストの健康と安全を最優先に考え、徹底した感染防止対策を議論した上で、従業員一丸となってパーク運営を行っていましたね。

★オリエンタルランド・東京ディズニーリゾートのあゆみ

1960年7月
①株式会社オリエンタルランド設立

1970年3月
千葉県から埋立地の分譲開始

1960

1970

1964年9月
浦安沖の海面埋立工事開始

1980年12月
東京ディズニーランド建設着工

1983年4月
②東京ディズニーランド開園



2000年7月
■イクスピアリおよびディズニーアンバサダーホテル開業

2001年7月
■ディズニーリゾートライン開業

1996年12月
東京証券取引所市場第一部上場

2001年9月
③東京ディズニーシー開園

■東京ディズニーシー・ホテルミラコスタ開業



2008年7月
■東京ディズニーランドホテル開業

2016年6月
■東京ディズニーセレブレーションホテル開業

2022年4月
■東京ディズニーリゾート・トイ・ストーリーホテル開業

2024年6月
■ファンタジースプリングス、ファンタジースプリングスホテル開業



東京ディズニーシー 25周年
“スパークリング・ジュビリー”



2026年に開園25周年を迎える東京ディズニーシーでの
アニバーサリーイベント

●開催期間:2026年4月15日(水)~2027年3月31日(水)

■対談

まずはアクションをしてみること。最初から無理だと判断せず、少しでも行動すれば、そこで初めて見えてくる新しい景色があります。何も行動せず、いきなり何かを成し遂げることはできません。考えて行動して、考えて行動して……。その連続で世界が開いて、可能性が見えてきます。



◆あなたと社会に、もっとハピネスを。

芝井 オリエンタルランドの企業理念・ミッションについてお伺いできればと思います。パーク運営については、ディズニーランドの生みの親、ウォルト・ディズニーの理念を中心におきながら、時代の変化に合わせて取り組まれてきたと思いますが、オリエンタルランドの現在の経営方針を教えていただけますか？

高橋 2025年4月に「2035年長期経営戦略」を発表しました。その中で最初に掲げているのは、「あなたと社会に、もっとハピネスを。」という言葉です。ここでの「あなた」とは、パークを訪れるゲストをはじめ、キャスト・従業員たち、取引先など関係するすべての方々のことです。そのすべての方々と、私たちを生かしてくれる社会にハピネス(=幸福)を届けていく。それが私たちの使命です。その使命を果たすことによって、持続的な成長、サステナビリティが必然的に生まれてくるという考え方です。

もともと東京ディズニーリゾートの用地は、浦安沖の海面を当社が埋め立てる代わりに千葉県から譲り受けた「公共の土地」です。そのため、公共の文化・厚生・福祉に寄与し、社会に還元す

ることが私たちのミッションだと考えています。なつかつ従業員が生きがいややりがいを持ち、ゲストに心から楽しんでいただける場所を提供する。日々の生活では誰しもさまざまな悩みや苦労があると思いますが、この東京ディズニーリゾートでは、それらすべてを忘れて非日常の世界を体験していただきたい。このような体験が実現できた時、ゲストにとって忘れられない、人生の豊かな思い出の一つになるでしょう。例えば子供の頃にパークに連れてきてもらった方は、親世代になった時に自分の子供とパークを訪れ、思い出が積み重なっていく。世代を超えた思い出の循環や連鎖が、私たちの目指すファミリーエンターテイメントのかたちです。ハピネスを創造する素晴らしい世界をずっと届けていきたいと思っています。

そのためには、同じことを続けるだけではいけません。ウォルト・ディズニーの言葉に「ディズニーランドは永遠に完成しない。この世界に想像力が残っている限り、成長し続ける」というものがあります。パークは常に進化し続けるという考えを表現した言葉です。大切に残していくものと、変えていくものを丁寧に見極めながら、新しい体験や発見につながる出会いをどんどん提供していきたいと考えています。

芝井 私たちの世代が子供の頃は、金曜日の夜に『ディズニーランド』というテレビ番組がありましたよね。その日だけは親が夜更かしを許してくれて、ディズニーアワーを楽しんだ思い出があります。また、私の妻は幼い時にアメリカ・アナハイムのディズニーランドを訪れたことがあるのですが、当時の経験はよく覚えているようで、東京ディズニーランドが開園する時はもうワクワクしながら「いつ行こうか」という話をしました。こういったかたちで人は記憶を心の中に留めていて、単に記憶を回顧するだけではなく、次のステップにつなげていこうとするものなのですね。

◆「考動」することで見えてくる新しい世界

芝井 「コスパ」や「タイパ」という言葉が若者世代に浸透していますが、目に見える効果や利益を重視しすぎている傾向があるのではと感じています。計算通りにうまくいくことばかりではありません。関大生や若者たちにアドバイスをお願いできますでしょうか。

高橋 今は情報が氾濫していますし、空気を読む同調圧力も強い時代ですよね。学生の皆さんに伝えたいことは、やはりまずはア

クションをしてみること。最初から無理だと判断せず、少しでも行動すれば、そこで初めて見えてくる新しい景色があります。社内の会議でも「できない」と言うより「少し動いてみよう」とよく伝えています。何も行動せず、いきなり何かを成し遂げることはできません。考えて行動して、考えて行動して……その連続で世界が開いて、可能性が見えてきます。

そしてもう一つ、SNSの世界だけに閉じこもらず「人と会ってみること」が大切だと考えています。大学時代の経験からも先輩後輩や友人たちと出会い、人ととのつながりから何かが生まれていくということを学びました。当社にも関大の卒業生がいますので、関大会として懇親会をすることもありますよ。また、経済効果を研究されている宮本勝浩先生をはじめ関西大学の先生方の活躍をテレビ番組などでお見掛けするとうれしく、私も負けないよう勇気を持って挑戦を続けていきたいと感じます。

芝井 改めて、浦安市のご出身で、マーク・トウェインなどのアメリカ文学を学ばれた方が、東京ディズニーリゾート運営会社の経営者になられるなんてドラマのようです。ディズニーに導かれた高橋社長のさらなるご活躍と、東京ディズニーリゾートの発展を関西大学から応援しています。

「コスパ」や「タイパ」という言葉が若者世代に浸透していますが、目に見える効果や利益を重視しすぎている傾向があるのではと感じています。計算通りにうまくいくことばかりではありません。

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]

LEADERS NOW!

誰かの物語があなたに寄り添つてくれることを願います



書き続けることで たどり着いた場所

痛みのない若き日を、いつか思い出すあなたへ

◎作家

一穂 ミチさん 一社会学部 2000年卒業

大学時代から始めた二次創作活動をきっかけに、才能を見出されて飛び込んだ一般文芸の世界。そのしなやかな文体と予測不能なストーリーで読者を引き込み、抜群の発想力で人気作家の仲間入りを果たした一穂ミチさん。コロナ禍に生きる人々を描いた『ツミデミック』では第171回直木賞を受賞した。これまでの歩みと創作に込める想いについて話を聞いた。



◎在学中に二次創作からスタートした執筆活動

子供の頃から読書家の母親に連れられて図書館によく通った。ジャンルにとらわれず、さまざまな本を手に取って読書にふける日々は今でも続く。中でも中高生時代に読んだ『苦海浄土—わが水俣病』(石牟礼道子)や『硝子戸の中』(夏目漱石)は忘れられない。自ら選んだ本ではなく、教科書の中で出会った文章に心をつかまれたからこそ、長く記憶に刻まれているという。

人の心に潜む“不思議”に惹かれ、心理学を学ぶため関西大学社会学部へ進学。産業心理学を専攻するも、アンケート調査や統計分析など想像以上に理系的なアプローチが必要だった。「尺度づくりや有意差の検証で苦労したのは強く印象に残っていて。ということは、どこかで役に立っているんだなと思います。理系的な学びが実は作品づくりに生かされているかもしれませんし、アンケートの実地調査など地道な努力は何事にも大切なことだと思います」。キャンパスではやはり図書館によく足を運び、作家になった今では大学を舞台に執筆する時、母校の風景を思い描くのだそう。

そんな大学時代に始めたのが既存作品の二次創作だった。当時、二次創作を載せる個人サイトや同人誌が流行し、一穂さんも自分でサイトを作って次々と作品を掲載していた。大学卒業後、就職してからもコツコツと書き続けていたが、そんなある日に転機が訪れる。

◎流れに身を任せてたどり着いた世界

同人誌の即売会で、編集者から「商業誌でオリジナル作品を書きませんか?」と声を掛けられた。最初はアルバイト感覚で気軽に書き始めたが、『イエスかノーか半分か』がアニメ映画化され、劇場でも人気を博した。

やがて他社の編集者からも誘いがあり、現在の作家活動がスタート。「私の中では、好きでやっていたことが、流れに任せていたら自然とここにたどり着いたという感覚です」。

自分が納得できる作品を生み出し続けることが難しい作家活動。毎回不安を抱えて四苦八苦しながらも、書き続けていてよかったですと感じる瞬間がもちろんある。「私は強く訴えたいことや言いたいこと、そういった強烈な動機があって書くタイプではないんです。それでも思いがけない表現がふっと出てきて、『このために書いていたんだな』と腑に落ちる。その瞬間ホッとします」。

◎直木賞受賞にはうれしさよりも安堵

2024年にはコロナ禍に生きる人々を描いた『ツミデミック』で第171回直木賞を受賞。うれしさよりも「もう直木賞のことを考えなくていい」という安堵の気持ちが大きかった。過去に2作品がノミネートされたこともあり、何を書いていても頭の片隅では直木賞のことを考えていた。しかし受賞したことで、執筆に向かう気持ちが随分と楽になったのだそう。

受賞後、選考委員の一人に「書き続けなさいよ」と声を掛けられた。大きな文学賞を受賞すると、燃え尽き症候群やプレッシャーでキャリアが途切れてしまうケースも少くない。一穂さん自身も、解放的な気持ちがある一方で受賞者として荷の重さを感じていた。「けれど、『この作家はこれからも書き続ける』と信じてくださったのだと思うので、その期待だけは絶対に裏切るわけにはいかない。たとえこの先に書いたものがつまらなくて、結果、転んだけがを負ったとしても、その場から動かないという選択肢はありません」。

直木賞を受賞した今も会社勤めを続ける“兼業作家”としても知られている。「肉体的には、しんどいと思う時も正直あります。スケジュールを調整したつもりでも、結局は団子状態になっていて青ざめたり(笑)。ただ私は残念ながら四六時中書いていたい作家ではなくて。勤務時間中には小説を書けないので、必然的に『書かなきゃ』という想いからは解き放たれているんです」。会社員と作家、それぞれに向き合う時間が日々のルーティンとなって、互いに良い気分転換になっているという。

◎作家歴初となる新聞連載に挑戦

2025年11月からは、大正時代の大坂で活躍した画家・島成園の生涯を描く連載『灰に塗れ』が河北新報で始まった。美術展で見た彼女の自画像には、実際にはないという大きな灰色の痣が描かれていた。その鮮烈な印象が忘れられず、いつか島成園を題材にして書きたいと思っていた。しかし彼女の生涯を記した年表には空白も多い。その時期に何があったのか、この行動にはどんな意味があったのか、と頭を巡らせる日々は、かつて二次創作に明け暮れていた頃と同じ“妄想”的作業をしているような懐かしさもあるという。

新聞連載というスタイルは今回が初で、「いつか新聞連載ができた」と話していたことが実現した。「その時は深く考えていましたでしたが、後になって新聞は連載の中でも一番大変だということが分かって、既に少し後悔しています(笑)。けれど私の本を手に取ることがなかった層の方が読んでくださるかもという期待はありますね。だからこそ達成したら、なにかしら自分の財産になっていると信じています」。

最後に学生へのメッセージを聞いた。「やりたいことは、先延ばしせず今やってください。若い頃に“お金と時間ができたら”と思っていたことも年を取ると体力的に難しく、皆さんの若い身体が本当にうらやましいです。私にはないものを、皆さんは全部持っている——その実感が湧かないところも含めて若さだと思います」。

ます。吉原幸子さんの詩に、こんな一節があります。『はじめに来るのだよ／痛くない光りかがやくひとときも／でも知つてから／そのひとときをふりかへる二重の痛みこそ／ほんたうのいのちのあかしなのだよ』。いつか皆さんがこの“痛みのない若い日々”を振り返って、胸を痛ませる時まで私は作家でいたいです。そしてその時、私でなくてもいいので、誰かの物語があなたに寄り添つてくれることを願います」。

▼千里山キャンパスで行われた一穂ミチさんの講演会。学生たちも質問者として登壇した



LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [卒業生インタビュー]

バーベキューでつながる 世代を超えたコミュニケーション 好きを追求し、唯一無二の存在に

●芸人（吉本興業所属）

たけだバーベキューさん
一商学部 2008年卒業

お笑い芸人として伸び悩む中、趣味で楽しんでいたアウトドアが人生の突破口となった、たけだバーベキューさん。先輩芸人に得意のバーベキュー料理を披露したことで噂が広かり、事務所内での認知度がアップ。バーベキューの専門性を追求し続けブログを開設したところ、レシピ本出版のチャンスをつかんだ。出版を機に「バーベキュー芸人」に転身して上京。豪快かつ簡単でおしゃれなレシピを多く提案し、今や刊行書籍は13冊に。活動のフィールドは国内に留まらず、バーベキューの世界大会へ出場するほどに広がっている。

BBQ
バーベキュー！
BBQ

たけだバーベキュー
■1986年兵庫県生まれ。関西大学商学部卒業。吉本興業所属。キャンプや登山、ロードバイク、狩猟など、趣味であるアウトドアの知識を生かして活躍中。2004年に関西大学とNSC大阪校に同時入学し、2007年にコンビで「M-1グランプリ2007」2回戦進出。2012年からビン芸人となり、2013年には著書『豪快バーベキューレシピ』（池田書店）が2万5千部の大ヒットとなる。同年、カナダ・アルバータ州のBBQ大使に就任。狩猟免許やキャンプインストラクターの資格を持つ。

●大学とNSC。多忙を極めたダブルスクール生活

「勉強できる人や足の速い人よりも、面白い人が人気者」。そんな関西の土壤に育まれた、たけだバーベキューさん。高校卒業後は吉本総合芸能学院(NSC)に進学する気でいたが、親から出された唯一の条件が「大学卒業」。高校の先生に頼み込んで勉強を教わり、関西大学に現役合格を果たした。「大学を卒業してからNSCへと思っていたら、先輩が『コンビを組もう』と説得に来たんです。熱いじゃないですか。『よし、分かりました！』とすぐに、一緒にNSCへ入学しました」。

当然、二足のわらじ生活は大変なもので、「人生で一番寝ていない時期」だったという。NSCの入学費や学費を稼ぐためのアルバイトに加え、ネタ作りに追われる毎日。大学は単位こそ落とさなかったものの、1年次生の記憶はほとんどなく、友達をつくる余裕もなかった。

「バーベキュー芸人」として活動の転機となった
レシピ本『豪快バーベキューレシピ』（池田書店）



転機となったのは、3年次生の時に所属した企業経営を学ぶゼミだった。そこで企業理念について研究し、仲間と議論を重ねる日々を送り、それまでの“ただ授業に通うだけ”だった学生生活は一変した。レクリエーションの機会も多く、仲間との絆が一気に深まり、その関係は今も続くかけがえのないものとなった。

●ルールで縛らない、自由と失敗を楽しむバーベキュー

もともとアウトドアが大好きで、18歳で自動車の運転免許を取得して以来、お笑いとは別軸で、大学や高校、NSCの友達らと海・山・川へと頻繁にレジャーを楽しんだ。「バーベキューが目的ではなく、遊びついでの食事がバーベキュー。網と肉だけ持つて行って石を組んで、炭も買わずに拾った流木で肉を焼く。だから炎がメラメラ上がって焦げちゃったりするんですけど、それも楽しかったですね」。

バーベキューをする上で最も大切にしているのは「ルールで縛らないこと」。肉も野菜も、好きなタイミングでひっくり返せばいい。焦げたりバサバサになったりしても、それがむしろ一番思い出に残っていたりするからだ。出汁パエリア茶漬けのよう、その場のノリで生まれるアレンジレシピも大歓迎。「もちろん、失敗もありますよ。マグロのカマ焼きをしてすごい火柱が上がったり、上京前最後の単独ライブの後にお客さん全員をバーベキューに招待したのですがケガリの脚を忘れてしまって、ほぼ地面の高さで肉を焼いたり」。それも、参加者全員が楽しめればOKだ。「バーベキューって、火を囲むだけで世代を超えて仲良くなれるコミュニケーションツール。そこが魅力なんです」。

●好きが高じてバーベキュー芸人に

自ずと料理の腕が磨かれていく中、芸人が集うお花見の席でバーベキューの腕前を披露する機会を得た。「たむらけんじさん主催のお花見で、大勢の芸人が集まる中、直径50cmのパエリアや、ダッヂオーブンで作ったローストチキンなど、派手なメニューをお披露目したんです。そこにいたハイヒールさんをはじめ、先輩方がめちゃくちゃ驚いてくれて」。これがNSC内で話題となり、

先輩の助言もあって「バーベキューが得意」というキャラクターを確立。バーベキューインストラクター検定やお肉検定などの資格を取得し、ブログも開設した。すると3カ月足らずで出版社からオファーがあり、「豪快バーベキューレシピ」の出版が決まったのだ。折しもコンビは解散。当時、専門分野に特化した芸人は少なく、覚悟を決めて芸名を「たけだバーベキュー」にした。「吉本興業を辞めてアウトドア業界に進もうと考えたんですが、喋れるのにもったいないと引



挫折もあったけど、好きなことは揺るがなくて、一生懸命追求していたらいろんな「好き」がミックスされて唯一無二のものになった。

き止めてくれて。タレント部から文化部へ移籍が決まったものの、文化部は東京にしかなかったんです（笑）」。

たけださんは何のつても無いまま上京し、過去にもらった名刺すべてにメールを送るなど、自ら営業活動を開始。アウトドアイベントやバーベキュー講座などの仕事を地道に開拓していった。こうした努力に先輩芸人との交流が加わり、「バーベキュー芸人の認知度は押し上げられた。「旅先で千原ジュニアさんから『今、昼ご飯にパッとバーベキューできる？』と言われ、『任せてください！』と即興でバーベキューを披露したんです。振る舞い終えたラジニアさんが『1時間でフルコースを出して僕らのお腹を満たしたすごいヤツがおる』とテレビで名前を広めてくださったんですよ。バーベキューと周りの方々に助けられて今があります」。

●世界を視野に、日本のバーベキュー文化を広く発信

「実は、バーベキューのオフシーズンである冬場は海外へ赴くチャンス。これまでアルゼンチンにアーサードというバーベキュー料理を見に行ったり、スペインのネギ料理カルソットを学びに行ったりしました」。2025年の秋にはアメリカで開催された食の世界大会「ワールドフードチャンピオンシップ」のバーベキュー部門に参加。スペアリブやブリスケットなどの肉を調理し、世界のレベルに大きな刺激を受けたという。

一方で、たけださんはさまざまなアパレルメーカーやライフスタイルブランドとコラボレーションし、自分が欲しいと感じた機能を盛り込んだアイテムも多数展開している。今後はキャンプやアウトドアが楽しくなるグッズの開発や、温泉やサウナとバーベキューを組み合わせた空間プロデュースなどの活動にも力を注ぎたいと構想中。さらに、日本の優れたバーベキュー文化——独自の焼き方を持つピットマスターの存在や、岩手切炭や能登の切出七輪といった地方ならではの卓越した用具を広めるために、書籍の出版やコミュニティを形成する役割も担いたいと語る。

「僕、ずっと好きなことをやってるんですよ。挫折もあったけど、好きなことは揺るがなくて、一生懸命追求していたらいろんな「好き」がミックスされて唯一無二のものになった。心底好きなことを追い求めていたらこんな面白い人生になるんだと、お笑いとバーベキューに気付かせてもらいました」。

LEADERS NOW!

■リーダーズ・ナウ [在学生インタビュー]

更なる高みを目指し
プロ棋士として邁進

—大学での学びを囲碁の普及に生かす

●文学部 1年次生 三戸 秀平さん

幼少期から囲碁の世界に親しみ、その魅力にはまって自身の棋力を常に磨き続けてきた三戸さん。大学生でありながらプロ棋士という肩書きを併せ持ち、日々鍛錬を重ねている。学業と稽古を両立しながら、仲間たちと囲碁界を盛り上げたいと普及活動にも力を注ぐ。

盤面に白黒の碁石が並べられていき、その陣地の広さが命運を分ける——シンプルであるがゆえに、無駄をそぎ落としたその美しさが際立つ囲碁の世界。「何も無いゼロの盤上に、無限の選択肢から道を定め、自ら陣地を開拓していく。そのプロセスが囲碁の魅力です」と話すのは現在プロ棋士四段である三戸秀平さん。

▲小学生時代の三戸さん

小学1年生の春、祖父が東京から九路盤を持ってきてくれたのが、囲碁に触れた始まりだった。コツをつかむのも早く、素質を感じた祖父の勧めで教室へ通うように。同世代の子供たちが集まる教室は楽しかったが、その才能が抜きん出でていた三戸さんはすぐに高みを目指すようになった。

当時六冠だった井山裕太棋士のドキュメンタリー番組を見て、その強さにあこがれたのもプロへの道を進む後押しに。小学3年生の冬にスカウトされ、大会への出場経験も少ないまま採用試験をクリアし日本棋院の院生になった。院生になって5年後にはプロ試験にも合格、14歳でプロ棋士へ歩みを進めた。

順調にその才能を開花させてきたかに思えるが、伸び悩んだ停滞期も幾度となくあったそう。しかし先輩が開いた道場で、苦手だった詰碁に没頭したり、コロナ禍にはオンライン対局を重ねるなど、さまざまな形で向き合うことで都度その状況を打破してきた。「コロナ禍は頭の中を整理して、棋力を上達させる飛躍の充電期間となりました」。

一方で囲碁を通して触れた韓国や中国、台湾など東アジアの文化に興味を抱き、深く学びたいと「アジア・オープン・リサーチセンター(KU-ORCAS)」がある関西大学へ進学。キャンパスの立地は棋院にも通いやすく、学業と無理なく両立できている。興味があって履修した中国語の授業も楽しく学べており、今後は中国発祥といわれている囲碁の変遷などを学んで普及活動に生かしたいと意欲的だ。



三戸 秀平——みと しゅうへい
■2006年岡山県生まれ。岡山市立岡山後楽館高等学校卒業。文化会囲碁部所属。6歳から囲碁を始め、角慣れ六段門下。大阪こども囲碁道場生を経て、現在は日本棋院関西総本部に所属している。2021年の棋士採用試験は1位で入段、2025年に四段へ昇格。同年、日本棋院生時代の仲間たちと「IGO INFINITY」を結成し、若い世代への囲碁普及を目標に活動中。



2025年秋、日本棋院関西総本部の若手棋士5人で囲碁の魅力を発信するためのグループ「IGO INFINITY」を結成。10月に行われたプレイベントの「U40限定指導会」は盛況で、11月から始めた40歳以下限定教室では指導碁や囲碁講座、交流対局などを行っている。「この機会に若い世代の未経験者や初心者の方たちにも楽しんでもらい、囲碁界をもっと盛り上げていきたいですね」。最後に今後の自身の目標を聞いた。「23歳になるまでには結果を出したい。囲碁界の7タイトル、どれかは獲得したいと思っています」。力強いこの言葉に期待したいと思います。

よさこい踊りで
皆を笑顔に

—人生に「失敗」なんてない!?

●法学部 3年次生 加藤 春輝さん

観客を巻き込む圧倒的な迫力と躍動感あふれる踊りが魅力のよさこい。全国でも人気の高いよさこいに子供の頃から熱中し、関西大学のよさこいチーム「漢舞」で踊りたい!と志望大学を決めたという加藤春輝さん。2026年に25周年を迎える「漢舞」の24代目代表として任期を終えたばかりの加藤さんに、熱い思いで駆け抜けた活動を振り返ってもらった。



加藤 春輝——かとう はるき
■2004年埼玉県生まれ。東洋大学京北高等学校卒業。小学生の頃からよさこいを始める。関西大学学生チーム「漢舞」では24代目代表を務め、全国のよさこい祭りに数多く出場。2024年に大阪で毎年開催される「ごいや祭り」で準大賞、2025年には優秀賞を受賞。

賞を受賞。「全力で取り組んだので胸を張れる結果です」と笑顔を見せる。こいや祭りをはじめとする全国の祭り以外にも、2025年の大阪・関西万博での期間限定イベント「大阪ウィーク～夏～」でギネス世界記録に挑戦する盆踊りにも参加。チームでの活動量が多いぶんながらは強く、仲間はかけがえのない存在だ。

複数の班から成る「漢舞」での組織活動を通じて、いわゆる報連相の重要性や、同じ目標に向かって取り組む仲間の大切さも学んだ。そこで得たことは、就職活動や今後の人生でも役立てることが多いと話す。卒業後は社会人チームに入り、よさこいに一生かかわり続けたいとのこと。

「これからも観てくれる人たちを笑顔にするよさこいを踊り続けていきたい。そして周りの人を幸せにできる人になりたいです」。



▲10歳の時に参加した
「彩夏祭」(家族:父・母・弟)



研究最前線

世界を魅了する日本アニメーションの歴史と未来をひもとく研究 •Exploring the Past and Future of Globally Captivating Japanese Animation

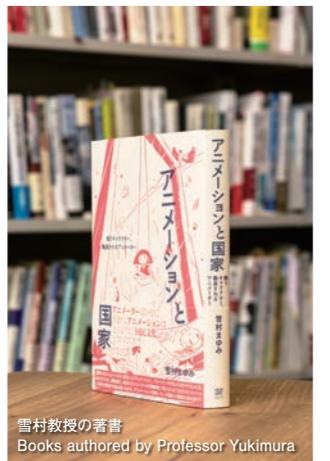


日本のアニメーションは国境を越えてゆく

—戦時中からたどる歴史に隠された日仏の共通点を浮き彫りに

Japanese Animation Crosses Borders

Revealing Hidden Japan-France Parallels through a History Traced from the Wartime Era



◎社会学部 雪村 まゆみ 教授

• Faculty of Sociology — Professor *Mayumi Yukimura*

日本のアニメーションは今や国内だけにとどまらず、世界中の人に魅了するグローバルコンテンツとなつた。社会学部の雪村まゆみ教授は、戦時に組織化されたアニメーション制作の現代における問題点や、遠く離れたフランスで制作されていた作品とのかかわりなど、独自の研究をまとめた『アニメーションと国家—戦うキャラクター、動員されるアニメーター』を2025年3月に出版。このたび日本アニメーション学会賞を受賞した。先行研究が少なかったこの分野を選んだきっかけや、研究にかける思いを聞いた。

Japanese animation has grown beyond domestic audiences to become a global cultural force that captivates viewers around the world. Professor Mayumi Yukimura of the Faculty of Sociology published *Animation and the State: Fighting Characters, Mobilized Animators* in March 2025. The study illuminates present-day challenges rooted in the wartime institutionalization of animation production and unexpected links to works produced far away in France. The book was recently honored with the Japan Society for Animation Studies Award. We asked her what led her to choose this under-explored field and what drives her research.

■ 戦時下に生まれた日本初長編アニメーション

—日本アニメーション学会賞の受賞おめでとうございます。この分野の研究を始められたきっかけを教えてください。

ありがとうございます。もともと戦争や文化遺産など文化社会学を研究する中で新しい文化がどのように生まれたのか、ということに興味がありました。「なぜ日本のアニメーションは世界でここまで人気があるのか?」そして「どのようにして日本のアニメーションが作られるようになったのか?」という好奇心が出発点でした。

実はその始まりは戦争と非常に深いかかりがあります。第二次世界大戦前からトーキー・アニメーションと称されるアメリカのディズニー作品などは世界中の映画館で上映されていましたが、当時の日本では個人作家によって短編作品が細々と制作されている状況にありました。しかし戦時中は言葉の壁を克服する表現様式や大衆性というアニメーションの2大要素を重視して国が投資します。そして、映画会社の組織的体制を国が管理し制作にも関与して、真珠湾攻撃をテーマにした『桃太郎の海鷺』や、手塚治虫にも影響を及ぼした『桃太郎海の神兵』といった長編作品を作らせたのです。しかし長編の制作が実現したからといって、戦争を正当化してはいけないということを強調したいです。

—同時期のフランス制作アニメーションにも注目されていますね。

フランスでも戦時に国家予算を用いてアニメーションが作られたという共通点がありました。特にヨーロッパではアニメーション発祥国とされており、エミール・コールやエミール・レイノーが初期のアニメーション作家として再認識されました。技術的に進んだ作品でその地位を確固たるものにするという考えがあり、国家がアニメーターの養成を支援し、組織的制作が実現しました。

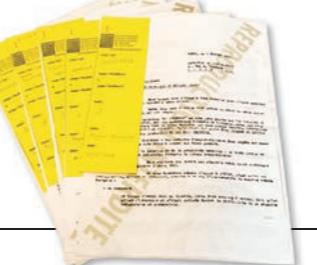
日本も古来の絵巻物や歌舞伎、淨瑠璃がアニメーションの起源だという評論がありました。そういった自国文化の発展という考え方が原点にあって、アニメーションの起源が自国の文化にあるという考え方方が台頭したことは日仏の共通点と言えます。

■ フランス現地で日本との関係性に迫る

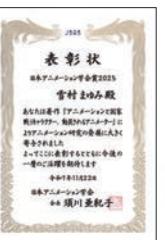
—フランスのアニメーションについては現地で調査もされたそうですね。

初訪の2008年にパリのシネマテーク・フランセーズ(Cinémathèque française)へ行きました。日本では戦時中の映画に関する資料は焼却されてほぼ残っていません。しかしこの施設内の図書館には戦時中の資料も残されており、興味深いものを多数見つけることができました。

戦時中のフランスアニメーション
映画に関する資料のコピー▶
Copies of materials on French
animated films during wartime



▼新千歳空港で実施された「日本アニメーション学会賞」贈賞式
Japan Society for Animation Studies Awards Ceremony



■ Japan's first feature-length animation born under wartime conditions

— Congratulations on receiving the Japan Society for Animation Studies Award. What led you to begin research in this field?

Thank you very much. My background is in cultural sociology, particularly the study of war and cultural heritage, and I've long been interested in how new forms of culture emerge. I began out of curiosity with regard to two simple questions: "Why is Japanese animation so popular worldwide?" and "How did Japanese animation come to be made in the first place?"

The truth is that animation's beginnings in Japan are deeply intertwined with war. Before World War II, American "talkie animations," such as works from Disney, were screened in theaters around the world. In Japan, however, only small independent artists were producing short films on a limited scale. But during the war, the government invested in animation, recognizing two key strengths: its ability to overcome language barriers and its mass appeal. The state also centralized and managed film-studio structures and even intervened directly in production, resulting in feature-length works such as *Momotaro's Sea Eagle*, which focused on the attack on Pearl Harbor, and *Momotaro: Sacred Sailors*, which later influenced Osamu Tezuka. I want to emphasize that the achievement of creating feature-length films must not serve to justify war.

— You also highlight animation produced in France during the same period.

In a notable parallel, France, too, produced animation with national funding during the war. Europe is often cited as the birthplace of animation, and early animators such as Émile Cohl and Émile Reynaud have been rediscovered and reevaluated. There was a strong belief in establishing animation's prestige through technically advanced works, and the state supported animator training and organized production systems.

In Japan, some critics pointed to traditional picture scrolls, kabuki, and joruri as the origins of animation. The idea that a nation's own culture should serve as the foundation for modern animation emerged in both countries, along with a desire to define animation's origins within one's own cultural heritage. This shared mindset is one of the similarities between Japan and France.

■ Visiting France site to explore its ties with Japan

— You also conducted on-site research in France on French animation.

On my first visit in 2008, I went to the Bibliothèque du Film in Paris. In Japan, almost all wartime film materials were burned and lost. But this library had preserved wartime documents, and I found many fascinating materials there.

Further research revealed that although many Japanese animation series, for example *Dragon Ball*, *Saint Seiya*, and *Candy Candy*, were broadcast widely in France from the 1970s onward, the broadcasts later decreased due to growing efforts to protect domestic productions. As a result, fans began organizing themselves through the original Japanese manga.

■研究最前線



またその後の研究で戦後、特に1970年代からは『ドラゴンボール』や『聖闘士星矢』『キャンドゥ♡キャンドゥ』などの日本アニメーションがフランスで数多くテレビ放映されたものの、自国作品を保護する動きによって放映が減り、ファンが原作の漫画を通して組織化し、ジャパンエキスポの前身となるイベントが開催されたことも分かりました。

そこで2025年は1カ月ほどフランスに滞在し、パリにある有名な漫画喫茶「MANGA CAFÉ V2」のほか、国公立図書館や書店、漫画専門店などを訪れました。もともとフランスはバンド・デシネ(フランス語圏の漫画)文化があるので、並んでいる漫画の数は日本作品が拮抗。『SPY×FAMILY』や『推しの子』といった近年の作品もスピーディに翻訳され、ほぼリアルタイムで店頭に並んでいました。

—スタジオ・ジブリとフランス作品の関係性にも記述がありました。

スタジオ・ジブリを興した故高畑勲監督は、レ・ジエ

モー社のポール・グリモーが制作した『やぶにらみの暴君』をきっかけにアニメーションの世界へ足を踏み入れたと公言しています(現在は、この改作となる『王と鳥』が視聴できる)。宮崎駿監督もまた、それまでのアニメーションは水平方向の動きしかなかったのが、同作品では垂直的空間表現によって描かれていることを新鮮に捉えました。宮崎監督が手掛けた『アルプスの少女ハイジ』や『ルパン三世 カリオストロの城』などの表現法と共通するものです。

また2023年公開の『君たちはどう生きるか』には、『王と鳥』の象徴でもある塔や鳥が同じように登場します。さらに驚くのはフランス語版タイトル。『Le Garçon et le Héron』を訳すと「少年と青サギ」となり、高畑監督が敬愛した『王と鳥』を意識したタイトルなのでは?と気付き、ぜひ書き記しておきたくなっています。

■今後、日本アニメーションがたどる道とは

—現在の業界の状況をどう見られていますか?

作品が大量生産され、ジャンルも多様です。消費者側にとっては歓迎することですが、アニメーターの労働条件の過酷さは国連人権理事会に指摘されるほどです。アニメーションが好きで、制作にかかわりたいと専門学校で学んだアニメーターは年々生まれています。しかし低賃金・長時間労働といった問題が根強くあるこの業界は離職率も高い。予算が潤沢なサブクリプション作品の台頭により、その改善が期待されています。

また最近の作品は背景を重視する傾向にあり、実在風景をモデルにすることでファンが現地に足を運んで作品世界を体験する聖地巡礼がひとつの大きな市場になっています。日本だけでなく、フランスでも『ハウルの動く城』の舞台といわれるコルマールは人気で、この町では「ヨーロピアン・マンガ&アニメ・ミュージアム」の整備計画が進んでいて2027年の開館を目指しています。



▲ペテランと若手が机を並べるアニメーターの仕事場(2016年3月、雪村教授撮影)
Animators' studio: seasoned professionals and young artists (March 2016, photo by Prof. Yukimura).

そういう経済効果がアニメーターなどに還元されるシステムができれば、業界の活性化と安定につながるのではと考えます。

そして日本のアニメーションは非常に人気がありますが、それが始まったきっかけは戦争だったことや、多数の作品の陰にはアニメーターたちの厳しい労働環境があるという点も知られてほしいと思っています。

—今後の研究のご予定をお聞かください。

日本のアニメーションや漫画が、フランスをはじめ世界でどのように受容されていくのかを研究したいですね。社会学者のエドガール・モランは「大衆文化は国境を越えてゆく」と言っていますが、ボーダーレスに世界を駆け回る日本のアニメーションを調査したいと考えています。もちろん私の調査対象は他にもあって、さまざまな国から生まれる文化の多様性を知る上で世界遺産や万博の研究も進めたいですし、京都で外国人観光客に人気が高いレンタル着物を通じて変容する着物文化にも注目しています。「好奇心を持ち続ける」が私のポリシーなので、今後も多方面で新たな文化現象を掘り下げていきたいです。

研究最前線 [Research Front Line Website](#) 

In 2025, I spent about a month in France and visited several locations, including the well-known manga cafe MANGA CAFÉ in Paris, public libraries, bookstores, and specialty manga shops. France already has its own *bande dessinée* culture, but the number of Japanese and French titles on the shelves was nearly equal. Recent works such as *SPY×FAMILY* and *Oshi no Ko* are translated very quickly, appearing in stores almost in real time, which surprised me.

— Your book also discusses the relationship between Studio Ghibli and French works.

Isao Takahata, co-founder of Studio Ghibli, openly stated that he entered the world of animation after encountering *The Curious Adventures of Mr. Wonderbird* (originally *La Bergère et le Ramoneur*) by Paul Grimault of Les Gémeaux (The revised version, *The King and the Mockingbird*, is available today). Hayao Miyazaki was also struck by the film's use of vertical spatial movement, unlike earlier animation, which had relied mostly on horizontal movement. This style aligns with the expressive approaches seen in Miyazaki's *Heidi*, *Girl of the Alps* and *Lupin III: The Castle of Cagliostro*.

In Miyazaki's 2023 film *The Boy and the Heron*, a tower and a bird, both symbols of *The King and the Mockingbird*, appear in similar form. Even more surprising is the French title, *Le Garçon et le Héron* ("The Boy and the Heron"). The Japanese original title (*Kimitachi ha doukiruka*) of *The Boy and the Heron* is derived from Genzaburō Yoshino's *How Do You Live?* yet the French title is given as such. I realized that it might be intended as an homage to the film so beloved by Takahata, and I felt compelled to note that connection in my book.

■ The future path of Japanese animation

— How do you view the current state of the industry?

Animation is now mass-produced, and genres have diversified. For viewers, these are positive developments, but animator working conditions are so severe that they have been pointed out by the UN Human Rights Council. Each year, new animators graduate from vocational schools wanting to work in animation because they love it. Yet low wages and long working hours remain entrenched issues, leading to high turnover. With subscription-funded productions now providing larger budgets, there's hope for improvement.

Recent works also emphasize background art, and the practice of modeling scenery on real-world locations has created a strong "pilgrimage tourism" market as fans visit those places to experience the worlds of the shows. In France, too, the town of Colmar, which is to have been a model for *Howl's Moving Castle*, is extremely popular. A European Manga & Anime Museum is currently being planned there, with opening targeted for 2027. If economic benefits like these could be returned to animators, it would help stabilize and revitalize the entire industry.

Japanese animation is incredibly popular, but I also hope people recognize that its origins are tied to war, and that this popularity rests on the hard work of animators facing very difficult working conditions. I would be glad if my book could raise awareness of these facts.

— What are your future research plans?

I want to study how Japanese animation and manga are received around the world, including in France. The sociologist Edgar Morin asserted that mass culture crosses national borders. I want to track how Japanese animation moves freely across those borders. Of course, I have other research interests as well. To understand cultural diversity across the globe, I plan to continue studying world heritage sites and world expositions. I'm also looking at how kimono culture is changing through rental kimono, which are extremely popular with foreign visitors in Kyoto. My personal policy is to "stay curious," so I hope to continue delving into new cultural phenomena spanning many fields.

○関西大学北陽高等学校 創立100周年記念式典・祝賀会を挙行

「知徳体の調和」を胸に、さらなる100年へ！



2025年、関西大学北陽高等学校は100周年を迎えた。これを記念し、10月25日に同校体育館アリーナにて記念式典、ホテルニューオータニ大阪にて祝賀会を開催した。

北陽高等学校は1925年に北陽商業学校として開校。建学の精神「知徳体の調和のとれた人間の育成」を理念に掲げ、質実剛健・文武両道を旨として教育を実践してきた。戦後は硬式野球部やサッカー部の活躍をはじめ、学業・部活動ともに多くの人材を輩出しながら、運営していた学校法人福武学園は2008年に関西大学と合併し、第2の関西大学併設校・共学校として新たなスタートを切った。

北陽高等学校の創始者・山岡倭氏は、「関西大学中興の祖」と言われる山岡順太郎氏のご子息であり、初代校長に就任した糸島実太郎氏も関西大学出身。この縁は、北陽高等学校が関西大学の併設校となり、「関西大学北陽高等学校」として新たな一步を踏み出す、永続的なつながりへと発展した。さらに、北陽高等学校の建学の精神は関西大学の教育理念と重なり合っており、両校は時代を超えて互いに発展を支え合う関係を築いてきた。



併設校となり、関西大学北陽高等学校は中高一貫教育の推進や3コース制(特進アドバンス、文理、進学アスリート)を導入することで、特色ある教育を展開。生徒一人ひとりの個性や能力を最大限に伸ばす教育に注力するとともに、探究学習やグローバル教育を通して、自ら考え行動する生徒を育成している。これは、社会貢献や国際貢献ができる人材を社会に送り出すという、学校の目標に基づくもの。これまでに約3500人の卒業生が関西大学へ進学しており、その永続的なつながりと教育成果の確かさも示している。

式典では、吹奏楽部や創作ダンス部の演奏・演舞に加え、PTAがタレントの小畠千豊氏（吉本興業）を招き、講演会を開催。「『育てられ』『育てて』育ちきってない僕が思ったこと」と題し、ユーモアを交えた小畠氏の経験談が語られた。また、その後の祝賀会では、学校関係者や同窓会とともに100年の歩みを振り返り、さらなる未来へ向けた展望を共有。盛大に創立100周年を祝した。

○「泊園書院」開設200周年記念シンポジウムを開催

関西大学の知的ルーツ、 大阪ナンバーワンの学問所

10月24日と25日、「泊園書院開設200周年記念シンポジウム—泊園書院から関西大学のルーツをひもとく」を、梅田キャンパスにて開催した。

本学の知的ルーツの一つである泊園書院は、江戸時代後期の1825(文政8)年に藤澤東畊が大阪に開いた漢学塾。「泊園」は「さっぱりとした心持ちで学問にいそしむ学び舎」を意味し、「書院」は「私塾」を指す。その後、東畊の子孫である藤澤南岳、黄鶴、黄坡の歴代院主、及び石濱純太郎らによって維持・発展し、一時は「大阪ナンバーワン」と称される学問所として栄えた。1948(昭和23)年に閉鎖されるまでの間に学んだ門人は1万人以上とされ、各界にわたって優れた人材を輩出。大阪と日本の近代的な発展を根底から支えた。

4代院主・黄坡の死去により泊園書院は幕を閉じたが、その蔵書や収蔵品は本学に「泊園文庫」として一括寄贈され、漢籍を中心とする近世大阪文化の一大コレクションとなった。この寄贈をきっかけに、本学初の本格的附置研究所「東西学術研究所」が創設され、学術を受け継ぐ「文学部東洋文学科」の開設にもつながった。また、「泊園記念会」も設立されるなど、本学は泊園書院の伝統を受け継ぎながら、学問・教育の発展に取り組んでいる。



シンポジウム初日は、泊園書院の歴史や活動を紹介するビデオ映像が、本学OBの落語家・林家染太氏のナビゲーションにより上映された。また、黄金時代を築いたとされる第2代院主・南岳の功績を偲んで誕生した銘菓「南岳」が、事前に申し込んだ参加者に進呈された。

続く基調講演には、東京大学大学院総合文化研究科の高山大穀准教授が登壇。東駿による荻生徂徠研究について解説し、「東駿は徂徠の自筆書があると聞くと、所蔵者を訪ねて閲覧し、徂徠の書簡の相手に関する資料まで調べていた。その調査・分析の姿勢は、現代の研究にも通じるものがある」と、その学術的な生目性を評価した。

さらに、歴代院主が学問のみならず芸術にも造詣が深く、琴を嗜んだことにちなみ、東西学術研究所の山寺美紀子非常勤研究員が、十弦琴の演奏を披露。参加者は柔らかな音色に静かに耳を傾けた。

最後は、高山准教授、泊園記念会名誉会長の藪田貴名教授、泊園記念会会长の吾妻重二文学部教授らが登壇。泊園書院の特徴や意義について討議。今掛から質問も交えて活発な議論を開催した。

翌25日にも多様な研究報

告が行われ、多くの人が来場した。また、記念行事の一環として、同20日から11月15日まで、総合図書館展示室にて泊園文庫の貴重な資料を紹介する記念特別展示も開催された。





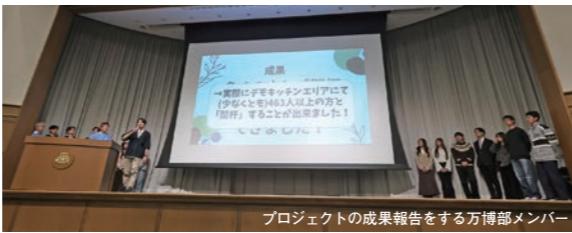
未来へつなぐ、大阪・関西万博での取り組み ＼やつたで、万博。／

○「関大万博部」が解散式を挙行。新団体「KU NEXPO」が始動

総勢140人の情熱が紡いだ「未来社会のデザイン」



「私たちがやらなきゃ誰がやる!」「万博のワクワク感を伝えたい!」——熱い志を抱き、2023年5月に20人で発足した大学公認の学生団体「関大万博部」が12月4日、その活動の集大成となる解散式を執り行った。最終的に総勢140人に拡大した同部は、「いのち輝く未来社会」の実現に向け、8つのプロジェクトを展開。



2025年には、夢洲会場での「夢洲関大Days」を通じたステージパフォーマンスや展示、体験企画、学内での「関大万博Weeks」など、計24件のイベントに参画した。7月には千里山キャンパスで「関大万博フェスタ～巡縁祭～」を成功させるなど、本学ならではの発信力と情熱で万博を軸としたさまざまな縁を育んだ。

解散式には、関大万博部の学生のほか、理事長・学長をはじめとする大学教職員、校友会関係者ら100人以上が出席。学生たちは激動の2年半の活動を振り返りながら、それぞれの挑戦の軌跡を報告した。

関大万博部 8つのプロジェクト

- 絵文字を使用して世界共通のコミュニケーションツールを開発する取り組み「エモジケーション」
- 非常食アレンジ弁当の開発に取り組んだ「未来の私たちへ」
- オリジナルのクラフトコーラ&ビールの開発を通じてコミュニケーションの活性化を図った「関杯」
- キャンパス内に万博海外パビリオンの疑似空間を演出し、国際交流・多文化共生を促進した「Welcome EXPO」
- 学生や地域向けの万博関連イベントを企画した「関大万博フェスタ」
- 学食で食の多様性を発信する万博メニューを開発した「関大EXPO食堂／KUDF」
- 子供たちの夢を応援し、挑戦する機会を創出した「ココミラ」
- 関大独自の万博機運醸成アイテムを製作した「関大万博グッズ製作」



▲万博会場フードコートで販売した非常食アレンジ商品「かんぱうサンド」



▲「TEAM EXPO」パビリオンの関大で共創チャレンジの成果を発表

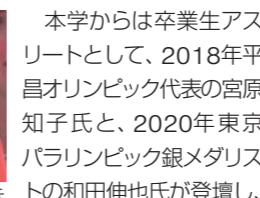
同部は今後、「万博は閉幕からが、スタートだ」を合言葉に、レガシーを継承するフェーズへと移行する。団体名称を「KU NEXPO」に一新し、「人と人をつなぎ、アイデアとチャンスが交錯する場所を作る」ことを目指して、大阪に熱を届ける新たな挑戦へと歩みを進める。

○イタリア館のクロージングセレモニー「ワールド・イタリア・スポーツデー」に参画

万博からミラノ冬季五輪へ

関西大学は、10月13日に開催された大阪・関西万博イタリア館のクロージングセレモニー「ワールド・イタリア・スポーツデー」に参画した。

同イベントはミラノ・コルティナ2026冬季オリンピック・パラリンピックをテーマに、イタリア政府が世界各地で同時開催した国際的な企画。当日は、在大阪イタリア総領事館およびイタリア政府機関の主催により、イタリア陸軍音楽隊の演奏や2026年冬季五輪のムービー上映、政府代表者のスピーチなどが行われた。また、会場の特設スケートリンクでは、聖火トーチの引継ぎ式などが実施され、万博最終日にふさわしい華やかなフィナーレとなった。



▲卒業生アスリートの宮原知子氏(左)と和田伸也氏



競技を通じて得た経験や未来への思いを語った。そのほか、アイススケート部の学生3人がエキシビションに出演し、フィギュアスケートの演技を披露。式典のクライマックスを美しく彩った。

今回のセレモニーは、万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」と、オリンピック・パラリンピックの「平和と共生」の理念をつなぐものであり、聖火トーチの引継ぎや学生の演技は、未来に「希望のバトン」を渡す象徴的なシーンとなった。

○サウジアラビア館展示のサンゴ構造物を受贈

万博を機に「持続可能な海洋再生研究」を



▲リボーンチャレンジでの展示(右:化学生命工学部上田正人教授)

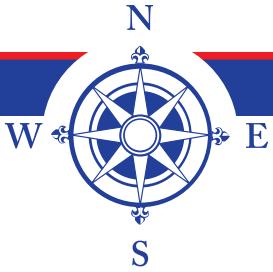
10月10日、大阪・関西万博サウジアラビア館で展示されていた3Dプリント製のサンゴ構造物約100体が関西大学に寄贈された。これらは紅海のサンゴ礁再生をテーマにした展示の一環で、実際のサンゴ骨格と同形状のレプリカをサンゴ由来の素材で3Dプリントして製作したもの。10月15日には、千里山キャンパスで受け渡しセレモニーが開催され、製作に用いられた3Dプリンター装置も寄贈された。これにより、本学でのサンゴ構造物の製作・量産が可能となる。

今回の国際連携は、8月5日～11日に大阪ヘルスケアアパリオンで開催された「関大リボーンチャレンジ」がきっかけとなった。本学主催で9社の企業と出展したところ、参画していた本学発ベンチャー・株式会社イノカの展示をサウジアラビア館のスタッフが視察。独自の「環境移送技術®」を用い、世界で初めて真冬のサンゴ人工産卵に成功した同社の実績が注目され、協力が実現した。

寄贈されたサンゴ構造物は、化学生命工学部の上田正人教授が開発した「サンゴポリープ定着技術」を用い、サンゴの細胞を移植・育成する共同研究に活用される。この研究には、株式会社イノカとサウジアラビアの大学・研究機関が参画。生命を宿さないサンゴ骨格に「命を吹き込む」新たな国際共同研究がスタートする。



▲株式会社イノカとサウジアラビアの大学・研究機関とともに始まった国際共同研究



第48回関西大学統一学園祭を開催

11月1日～4日、第48回関西大学統一学園祭が千里山キャンパスにて開催された。今年は「祭前線」をテーマに掲げ、約800人の学園祭実行委員が盛り上げに尽力。来場者数は延べ14万人を超える、集計開始以来、過去最高の動員数を記録した。

期間中は、模擬店や講演やライブ企画のほか、ゼミや研究会による展示や論文発表など、学生らが日頃の成果を発揮。ステージではダンスや演奏などが披露され、キャンパスは熱気に包まれた。また、2日には、卒業生であるジャルジャル・



①「今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は」で

使用された衣装の展示

②関西大学文化会書道部による書道パフォーマンス

③④関大キャラクター総選挙2025

福徳秀介氏の原作小説を実写化し、関西大学を舞台にした映画『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』の上映会を実施。最終日には、関西大学のマスコットキャラクターの人気を競う「関大キャラクター総選挙2025」の結果発表も行われた。その後の後夜祭では夜空に大輪の花火が打ち上げられ、歓声と拍手に包まれた感動のフィナーレを迎えた。

社会学部・齊藤潤一ゼミと俳優・板垣李光人氏のティーチイン試写会を開催



板垣李光人氏

社会学部・齊藤潤一ゼミと東映株式会社は、映画『ペリリューー楽園のゲルニカ』の公開を記念する「ティーチイン試写会」を12月1日、千里山キャンパスにて実施した。

戦争体験者が減少する中、齊藤ゼミは戦争関連資料を調査し、記憶の伝承に注力してその意義と可能性を探っている。

当日は映画上映に加え、主演の板垣李光人氏と齊藤ゼミの4年次生によるティーチイン・セッションが行われ、戦後80年を迎える今、若者が戦争と平和について考える貴重な機会となった。

防災・福祉に強いまちづくりへの挑戦！

「関大前まつり」初実施

11月15日、地域と大学が協働する新たなイベント「関大前まつり」が関大前通りで開催された。関大前商店会実行委員会主催、吹田市後援による本イベントは、地域活性化と地域防災・福祉の機運向上が目的。当日は屋台や縁日、関大生によるショーが行われ、一部歩行者天国となった関大前通りは家族連れなどで大いに賑わった。また、防災の実証実験のほか、認知症の方や子供の搜索を支援する「みまもりあいアプリ」の使用試験なども実施された。



▲多くの人が賑わった関大前通り



関西大学体育会が大活躍！



テニス部 10月26日、全日本大学対抗テニス王座決定試合の決勝が愛媛県総合運動公園テニスコートで行われ、女子が創部以来初の優勝に輝いた。試合は主将の山口花音さん(経済学部4年次生)が勝利を決め、テニス部104年の歴史に新たな1ページを刻んだ。また、MVPに高山遥さん(商学部2年次生)が選出された。



陸上競技部 11月15日、第87回関西学生対校駅伝競走大会(丹後大学駅伝)が京都府丹後地域で行われ、本学は3時間45分55秒の大会新記録を樹立し、56年ぶり12回目の総合優勝を果たした。これにより、来年度の出雲大学駅伝への出場権を獲得。また、最優秀選手に嶋田匠海さん(文学部4年次生)が選出された。



拳法部 10月26日、第40回全日本学生拳法個人選手権が愛知県・パロマ瑞穂アリーナで行われ、女子で前田望結さん(文学部2年次生)が優勝の快挙を果たした。また、12月7日、第70回全日本学生拳法選手権大会が大阪府・河内長野市立市民総合体育館で行われ、女子(3人制)の部で2年連続の準優勝を飾った。

大発行日：2026年1月26日(令和8年)1月26日
大阪府行・関西大学
市山手町3-3-35
企画室広報課
www.kansai-u.ac.jp

